

「初恋はハコの中」

美野哲郎

登場人物

- 楠木あすか（18）
高校三年生。
市民劇団『フルーツサンド』団員。
- 入江陽太（18）
不登校児。あすかの同級生。
- 吉沢時生（28）
高校教師。あすかの担任。
- 白羽しほやよい（18）
あすかの親友。
- 掘田明広（17）
あすかの同級生。
- 松永光嗣（36）
市民劇団『フルーツサンド』団長。
- 須々木七音（48）
市民劇団『フルーツサンド』団員。
- 楠木美砂（46）
あすかの母親。
- あすか（幼少期）
- 陽太（幼少期）

○楠木家・あすかの部屋

眠たげな入江陽太（18）の顔がタブレットに映る。楠木あすか（18）、モニター越しにその顔を撫でる。上半身は制服、下半身はパジャマ。

あすか「あけましておめでとう。陽太くん」

陽太、あすかに気づいていない。

あすか「今日も寝癖ついてるよ。可愛い」

吉沢の声「はい皆さん、新年あけましておめでとうございます」

あすか、ズームを全体画面に戻す。吉沢時生（28）が教室でホワイトボード前に立つメイン画面。その他分割画面にランダムで陽太や同級生が映る。

吉沢「ちゃんと起きてつかー？ 受験生はいよいよここから本番。そうじゃない人も勿論、体調管理は厳しく努めるように」

あすかM「私たちの学校は、支給されたタブレットの中にあつた」

吉沢「みんなはよく頑張った。貴重な高校三

年間を、その小さなハコの中で耐えたんだ。

無駄にしたくないだろ」

あすか「ハイハイ無駄にしませんよ、と」

あすか、再び陽太の画面をピン留め。

あすかM「彼は入江陽太くん。私が三年間も見つめ続けていたなんて、まさか気づいてたりしない。リモート授業バンザイ」

吉沢の声「で、だ。卒業式についてだが」

あすか「お」

全体画面に戻す。

吉沢「昨年は密を避けて在校生は欠席。保護者も最小限。それでも結構集まったんだな」

男子・堀田明広のスマホから、美少女ソーシャルゲームのタイトルコール。

明広「あ、すみません」

音もなく笑うクラスメイト一同。

吉沢「ミュートにしとけ。バカ」

明広（顔を覆い）「死にたい」

吉沢「そこで今年は卒業生の来場は許可しますが、基本リモート卒業式となります。在校

生も、保護者の来場も無し」

音もなく抗議する一部生徒達。

吉沢「なんだ？ ミュート解除して言え」

一部生徒達、音入れてブーイング。

吉沢「学校側としては、参加を推奨しない。

本当に形式だけの簡素なものになるから」

○高校・三年D組

中継中の吉沢、教室に一人きり。

吉沢「ま、ほとんど顔も付き合わせてない先生に会いたい奴なんていないだろうけど。

気が向いたら万全の対策をして来て欲しい」

○地元商店街・シャッター通り

地方の閑散とした光景。

『T 2022年 1月』

吉沢の声「三月にもなれば情勢も変わっていろいろ、祈る事しか出来ないが」

○用水路

マスクが流れていく。

吉沢の声「先生としてはさ。皆は皆で、いつか世界が良くなったら、改めて卒業パーティーでも開いてくれたらって思う」

あすかの声「……いつかっていつよ」

○楠木家・あすかの部屋

机上のタブレットで授業を流したまま
ベッドに寝転ぶあすか、スマホで茶髪
の白羽やよい（17）と動画チャット。

あすか「いつかなんて無くない？ クラスの
絆とか無いし。会ってないんだからさ」

やよい「それなー。うちの人間関係って大
体、中学で止まってるもんな」

あすか「ねえ、やよい。陽太くん卒業式出な
かったらどうしよう。きっともう彼に会う
チャンス無いんだよ、私」

やよい「知らん。あすかがモニター越しに一
方的な片思いを楽しんできた罰じゃ」

あすか「あのさ、うちのクラス堀田くんいる

じゃん。やよいの幼なじみのオタク」

タブレットの分割画面に明広の姿。

やよい「アキが何？」

あすか「そのアキくん。おなクラ男子のよしみでさ、アキくんから陽太くんを探り入れて、卒業式出るかどうか訊けないかな」

やよい「やだよ、あすかがテメエで頼め」

あすか「だから。同じクラスだったって直接会う機会なんか無いんだって」

やよい「何年ズームしてんだよ、個人チャットすりゃいいだろうが」

あすか「えーいきなりはアキくん勘違いしち

やわない？ オタク女子に免疫なさそう」

やよい「いや自惚れんな……否めねえけど。

じゃなくて、あすかが直接、その陽太くん
にチャットで訊けつつってんの」

あすか「は？ やだやだやだ怖い。だって、

向こうは私の存在すら知らないかもだよ？」

やよい「そんな相手に恋したんだろうが」

あすか「……だから、最後に会いたい。ね

えアキくんをお願いしてよ。陽太くんが、
卒業式に出席するよう」

やよい「やだ。めんどいし回りくどい」

あすか「なんでなんで。私のお願いだよ？」

やよい「自分を買いかぶり過ぎだろ……私、

アキにコクられてフツてんだよね」

あすか「え」

やよい、ふてくされ。

あすか（興奮）「えーっ？ きゃあーっ」

やよい「うるせえ」

あすか「何それ言ってよ。いつのまに」

やよい「わざわざ言うかよ、あすかじゃない

んだから……冬休みにな」

あすか「そっか、そうだったんだ……やよい

とも、全然会えてないもんね。最後会った

のいつだか覚えてないや」

やよい「今、今」

あすか「直接って事。こうして顔見てるら満

足しちゃうけど……なんだったんだろ、私

の高校生活。このまま終わっちゃったら」

やよい「けどよ。あすかは遊びも行かず、そこでストイックに勉強頑張ったから、みんなより一足早く大学決まった。だろ？」

あすか「て言うか、AO入試で舞台経験を買われたってただけけど」

やよい「役者って夢もあんじゃん。悪いことばっかじゃなかったって、うちの高校生活はさ。続けんだろ？ 芝居」

あすか（苦笑で誤魔化し）「ね。アキくんにお願いしてね？」

○団地沿いの河川敷（夕）

あすかと明広、マスク姿で腰を下ろす。

あすか（啞然）「ひきこもり？」

明広「そう。入江陽太は高校どころか、中学の時から学校に来てなかったよ。パンデミック関係ない」

あすか「え。だって、リモート授業にはずっと……（気づき）リモートだからか」

明広「罨だったな。引いた？」

あすか「え？ ううん全然。みんな、ひきこもりみたいなもんじゃん。今のうちら」

明広「似てるようで違うだろ」

フラッシュ・インサート――

チャットに映る眠そうな陽太の顔。

明広の声「それでも、入江は顔を出した」

× × ×

あすか「勇気、要ただらうね……私、全然知らなかった。いつも気ダルそうだなんて。

そこがちよつと無防備でセクシーだなんて」

明広「聞いてねえよ。なんか中一ん時、酷い

イジメがあったらしいんだよな。あんま知

ったようなこと言えねえけど……あ」

と明広、徐ろにスマホを取り出す。

あすか「？」

あすか、真剣にその動作を目で追う。

明広のスマホから、美少女ソーシャル

ゲームのタイトルコール。

あすか「ちよつと。今は真剣に話してよ」

明広「いや、デイリーミッションのノルマあ

るから。日頃の積み重ねが大事なの」

明広、ゲームしながら続ける。

明広「明日からは楠木が振り絞ればいいんじゃないの、勇気。自分で声かけるよ」

あすか「アキくんまでそれ言う」

明広（動揺）「アキくん？」

あすか「私じゃダメだよ。いきなり知らない女子からなんて困らせちゃうだろうし」

明広「なんだ、それくらい。いいじゃん困らせろよ。俺だってやよいに告白したんだ。」

積み重ねたもの全部壊す覚悟でさ」

あすか「……それで、どうなった？」

明広「全部壊れた。十年続いた俺の片思い」
あすか「それを私にもやれと？」

明広「おう。それをやれ。全部壊してこい」
あすか「……それを、やる」

○楠木家・あすかの部屋

タブレットの中で吉沢のHRが始まる。

あすか、身なりを整え姿勢を正す。

深呼吸。陽太の画面をピン留め。緊張して、個人チャット欄を開く。

× × ×

吉沢の授業中。あすか、陽太との個人チャット欄に文章を書いては消し。

『初めまして。いつも会ってるか』

『やあ。今日も眠そうな顔してる』

最後の書き直し。

『もうすぐ卒業だね』

あすか「……それを、やる」

確定。チャットに書き込む。

あすか、ギュッとクッションを抱え、

画面の陽太の反応を注視。

陽太、しばし気づかず。やがて視線下がり、目線が動いてチャットを読む。

あすか、チャットを注視。返信無し。

× × ×

教師変わり、次の授業始まっている。

あすか、再びチャットに書き込み。

『急にごめんなさい。クラスメイトの

楠木あすかです』

陽太の視線下がり、文を読んでいる。

陽太、手元を動かす。あすか、緊張。

チャットに返信。

『相手、間違えてませんか？』

あすか、小さくガッツポーズ。抱えて

いたクッションを投げ飛ばす。

呼吸を整え、返信を打ち込む。

『間違っていないよ。入江陽太くん』

陽太、無表情でカメラ目線。

『高校生活も最後だし、私とこうして

お喋りしませんか』

陽太、戸惑いの表情。

『みんなには内緒で。ね？』

あすか、作り笑顔。陽太、目を逸らす。

○あすかの妄想・三年D組

吉沢の授業中。マスクも無しで着席している生徒達。

窓辺の席の陽太、困ったように窓の外

に目を向ける。

あすか、離れた席から陽太に振り向き、
微笑んでいる。

○楠木家・あすかの部屋（数日後）

あすか、リモート授業中。

画面の中の陽太、目が泳ぐ。

あすかM「それから数日間。私を意識した陽
太くんは様子がおかしかった」

あすか、チャットに書き込み。

『寝癖、直すようになったね』

あすかM「しつこくチャットを送り続けて、
たまにわざと送らなかつたりして」

× × ×

あすか、リモート授業中。

あすかM「そうして二週間も過ぎたある日」
陽太から返信。

『ひきこもりオモチャにして楽しい？』

あすか「来た」

あすか、すぐに返信。

『楽しいです。お返事くれて嬉しい』

あすかM「絶対逃がさない」

陽太から返信『どうして？』

あすか「どうしてって」

あすか、返信を書き出し、

『三年前、一目ぼれしたの』

あすか「ムリ」

削除。打ち直し、送信。

『私、早めに大学決まっちゃったし』

チャットが二人の声で再現される。

あすかの声「私、早めに大学決まっちゃった

し、うちのクラスそういう人少ないから。

今、他のみんなと話しづらくて」

陽太の声「それで、どうして僕？」

あすかの声「理由ならさっき自分で書いてた

じゃん。陽太くんはどうせ大学行かないで

しょ？ てか行けないでしょ？」

しばし来ない返信。

あすかM「踏み込み過ぎたか？」

返信、届く。

陽太の声「悪かったな」

あすか、クスツと笑い、

あすかの声「それにさ、HRの時間。みんな先生の方見てるのに、うちらだけピン留めにしてお互いの顔見てたら面白くない？」

陽太、想像してみている。

あすかの声「ホラ、だって他の皆だってさ、真面目に勉強してるかわからないよ？」

リモート授業中の同級生たちの顔。

あすかの声「本当は誰を見てんのか、今カメラの外で何してんのか。全然わかんないじゃん。クラスメイトなのにとっても遠い」

陽太の声「授業中、楠木さんの顔アップで見つめてもいいの？」

あすか「え？」

○あすかの妄想・三年D組

授業中。同級生たちが教壇を向く中、

陽太があすかの視線に振り向く。

二人、離れた席で互いに見つめ合う。

○楠木家・あすかの部屋

あすか、熱くなった頬を手で煽ぐ。

あすかの声「いいよ別に。陽太くん意識し過

ぎじゃ無い？ とか言っ

陽太の声「わかった。そっちがいいって言っ

たんだ。きみのこと見てるよ、明日から」

あすかの声「うん。私も見てるからね」

あすか、余裕ぶってほくそ笑む。

立ち上がり、ベッドに倒れ込む。

PCの死角で足をバタつかせ、暴れる。

木霊する陽太の声「君のこと見てるよ。見て

るよ。見てるよ……」

あすか、枕に顔を埋め奇声を上げる。

あすかM「やっと始まるんだ、私の青春が」

○公民館・外観

七音の声「本当にごめんなさい」

○同・稽古場

『劇団フルーツサンド』使用中の札。

須々木七音（48）、平謝り。

七音「隔離期間終えました。勤務先で患者さんバタバタ倒れてたのに、稽古に顔出したの迂闊だったわ。松永さんにもご迷惑を」

松永光嗣（36）とあすか含む劇団員達（小学生から60代まで）、口々に

「おかえり」と七音を迎える。

松永「お気になさらず七音さん。またみんな笑顔で再会出来た。何よりなことです」

七音「あすかちゃんも。本当にごめんね、あなたに一生懸命練習してたのに」

あすか「もう慣れっこです。切り替えて次の公演頑張りましょう」

七音「ええ、そうね。うちの劇団があすかちゃん主演で送る最後の公演だもんね。今度こそ、最高の舞台にしましょう」

× × ×

劇団員一同、舞台『ピープル・イン・ザ・パープルスカイ』の台本片手に舞
台の稽古。教室を模して並べた椅子。

年齢問わず制服姿の劇団員達が教室で
過ごし、あすかが外に向けてモノロー
グ台詞を発する。

あすか（台詞）「それから今も、世界は狂い
続けている。空が奇妙な紫のオーロラに覆
われた、あの日からずっと」

団員達、あすかの背後で日常芝居。

あすか（台詞）「生き延びた私達が辿り着い
たのは、時の流れが停まったような廃校舎。
ここだけは空気が正常で、呼吸が出来る」

あすかも日常芝居に合流する。

七音（台詞）「それにしても不思議ねえ」

あすか（台詞）「何がです？ 田中さん」

七音（台詞）「学校っていうのは、迫る卒業
の期限がハッキリしている、猶予付きのモ
ラトリウムでしょう？ それが今では」

団員達、笑い合ってはしゃぐ芝居。

七音（台詞）「終わりもなく、世界が元に戻
るまでずっとここにいてイイだなんて」

あすかM「年齢もキャリアもバラバラの市民

劇団フルーツサンド。高校の同級生より長い時間、同じ空間を共にしてきた仲間達」

団員達、外に向けてモノローグ台詞。

団員A（台詞）「そう。私達は、永遠の青春を過ごしている」

団員B（台詞）「外の世界に行き場は無いから」

七音（台詞）「もう、何一つ元になど戻りはないから」

団員C（台詞）「私達の青春が終わるとしたら、それは」

団員揃って（台詞）「私の命が、終わる時」
あすか（台詞）「一生学校から出て行かなくてもいい。それって幸せなこと？」

○公民館・エントランス

自販機の受け口に落ちるジュース。

松永「あすか」

帰り支度にあすか、松永に振り返る。

松永（ジュースを投げ）「お疲れ」

あすか（キャッチし）「わ、ありがと。ボス
もお疲れです。どうでした私」

松永「うん？ あすかが演じたいようにすれ
ばいいさ。これで最後なんだから」

あすか「なんか毒がありますね」

松永「そりゃあるさ。荒削りだけどあすかに
は可能性と華がある。どんな形でもいいか
ら俺は続けて欲しいよ、芝居」

あすか「本気でしたよ。私だっけずっと」

松永「知ってる。みんな知ってるさ」

あすか「……このまま芝居続けたとして、あ
と何回、本気で準備していた公演がダメに
なるんでしょうね。今だっけわからない」

松永「それは別に、今の時代どのフィールド
でだっけ起こることじゃないか」

あすか「七音さんにはああ言いましたけど。
もう嫌なんですよ、何かを失う事が当たり
前のこの日々も、それだけの青春も」

松永「芝居やめて何すんのさ。俺そこがよく
わからないんだよな、芝居以外の人生」

あすか「それはボスが病気。演劇病。いや普通ですよ、遊ぶんです。遊んで恋して色々学んで、普通の若者の生活を……え？」

松永、あすかにフライヤーを見せる。

『永遠結晶』のオーディション告知。

松永「劇団『永遠結晶』。春に新作舞台のオーディションやるってよ」

あすか、フライヤーに見入る。

松永「憧れだって言ってたじゃない？」

あすか（かぶりを振り）「だから、お芝居はもういいんです。大学では新しい可能性を探すんですから」

松永「なんで。両立すればいいじゃないの、新しい可能性探しと演劇。そもそも迷うのはオーディション受かった後の話だろ」

あすか「受けなければ迷うことも無いんですよ。（フライヤー見て）それに無理です。だってこの日、卒業式だから」

松永「それがどうした。結論には早い」
あすか「あー残念だなー、だって卒業式は流

石に。じゃ、お疲れ様でした」

あすか、松永から足早に離れる。

松永「『永遠結晶』は秘密主義の劇団だ」

あすか（耳を塞いで）「聞こえないー」

松永「こんなチャンスもう何年も来ないかも

知れないぞ。あすかつ」

あすかM「私の青春は、恋に捧げるんだ」

○楠木家・リビング

あすか、掃除中の楠木美砂（46）に
声をかけ、

あすか「お母さん。美容院とコスメ代頂戴」

美砂「あのね。どこにそんなお金があると」

あすか「いいじゃん、受験さつさと済ませた

ご褒美。ね、ね」

美砂「まさか、どこぞの人混みにでも遊びに
行くつもりじゃないでしょうね。もう若い

子はすっかり油断して羽目を外しちゃって」

あすか「え。私は大人しく家いるけど」

美砂「え。（つまらなさげに）そうなの？」

あすか「だって危ないじゃん、外出するの」

美砂「じゃ、いいじゃないお化粧なんか……」

少しは、あすかも羽目外してみたら？」

あすか（笑って）「だから。お金」

○繁華街

マスクの紐を片方だけ耳にかけた状態のあすか、髪型もメイクもバッチリ決めた姿で、ショップを出る。

ショーウィンドウに自分の顔を映し、得意満面な笑みをひけらかす様に、ゆつくりとマスクで口を覆う。

あすかM「世界が、キラめいてる」

○楠木家・あすかの部屋

リモート授業中。

おめかししたあすか、ピン留めした陽

太とチャット。

あすかの声「髪切った以外で、気づくところ無い？」

陽太の声「眉毛切った？」

あすかの声「すごい即答。変かな」

あすか、照れて眉を隠し、陽太が笑う。

あすかM「その日から、リモート授業は私たち二人だけの時間で」

以下、目を跨いで点描。

× × ×

あすか、授業中に陽太とチャット。

あすかM「先生の声はBGM代わり」

日によってメイクを細かに変えていく。

あすかの声「今日はどこが違うでしょうか」

チャットで答え合わせ。

『目の色が違う？』『目のどこ？』

『まつげの下の』……続くやりとり。

× × ×

あすか、得意げにチャット。

あすかの声「わかる？ 本当はイエベに合う

リップこっちな。でも私が好きなのこっ

ちだから、こっちにしちゃった」

陽太の声「そっちだって似合ってるのでは」

あすかの声「えー全然だよ、似合っていないとこがいいの。あーあ、陽太くんもオシヤレ
覚えたら外出楽しくなるのになー」

陽太の声「いや、自分でメイクくらいなら」
あすかの声「え、意外。なんでなんで。なんで出来るの引きこもりなのに」

陽太の声「内緒」

あすかの声「内緒かー」

あすかM「となると私の一方通行みたいだけ
ど、陽太くんからも色々教わった」

× × ×

あすか、ホラー動画を眺める。

あすかM「漫画に動画にポッドキャスト。陽
太くんはウェブの無料コンテンツを知り尽
くしていた」

あすか、ショックシーンで仰け反る。

○あすかの妄想・三年D組

生徒達、教壇で授業中の吉沢を見てい
る。教室中央。あすかだけ椅子を逆さ

にして、真後ろの席の陽太と向き合う。

他の誰も二人の会話に反応しない。

あすか、ふざけて机をドン、と叩く。

あすか「ちよつと。あんな怖いなんて聞いてないよ。反則じゃんあんなの」

陽太「ギリギリまで反則じゃない、って思わせて、ここぞで反則を使うのがプロなんだ」

あすか「ふーん。ま、そう言われてみれば」

陽太「楠木さんがビビるとこ見たかったな」

あすか（前のめりに）「え。どうして？」

陽太「どうしてって。面白いから」

あすか「それだけ？」

陽太「それだけ」

あすか（体戻し）「あすかでいいよ。呼び方」

陽太「急に、何？」

あすか「いいから呼んでみ。あすかって」

陽太「……あすか」

二人、至近距離で見つめ合う。

あすかM「わかってる。こんなのは妄想」

○楠木家・あすかの部屋

あすか、無言でチャットに書き込む。

あすか M 「現実はこちら。会うこともなく、声も聞こえず。ただタブレット越しに文字を打ち込んでいる」

『もうすぐ本番なのに、ボスが全然演技褒めてくれないの。これが最後の舞台かも知れないから悔しくてさ』

あすか M 「だから。少し欲張ってみた」

『誰かにお芝居見て欲しいんだよねー
(顔文字) チラ チラ』

あすか、しばし待つ。陽太から返信。

『ボクでよければ』

あすか、カメラに向け親指を立てる。

○同・外観(夜)

あすかの声「じゃあ。本番前の大事な自主練なので、絶対邪魔しないでね」

○同・リビング(夜)

美砂、父、弟、あすかに振り返る。

あすか（高圧的に）「今から三時間。一歩でも二階上がってきたら、春に家出るまで絶対口きいてやんないから。いい？」

あすか、言い切り、階段を上がる。

美砂、父、弟、呆気にとられている。

○同・あすかの部屋（夜）

あすか、チャット越しに陽太と対面。

あすか（緊張）「こ、こんばんは……私の声聞こえてる？」

陽太、肯く。

あすか「陽太くんの声も、ハッキリ、聞きたいな」

陽太、咳払いして喉の調子を整え、

陽太「こんばんは」

あすか「あー、そういう声だったんだ」

陽太（不安げに）「イメージと、違った？」

あすか「ううん。ホントの声聞いたら、どんな声イメージしてたか忘れちゃった」

陽太「人と話すの、久しぶりで……すごく」

あすか「あ、私の声どう？」

陽太（咄嗟に）「可愛い」

あすか「えっ？」

陽太「あ、いや違う忘れて……うん、よく通
つてて……女優さんらしいっていうか」

あすか、台本でニヤける口元を隠す。

あすか「それじゃあ、見てください」

あすか、舞台に見立てたベッドに立つ。

× × ×

あすか、舞台『ピープル・イン・ザ・
パープルスカイ』の台本を手に練習。

あすか（台詞）「そう。一度は学校をドロツ
プアウトした私が、今こうして永遠の学園
生活を過ごしているなんてね」

× × ×

あすか（台詞）「歌？ うん、歌う事だけは
好きだったから、歌と生きていこうって思
ったの。歌があれば、独りでもいいって」

あすか、画面の陽太を見て、照れる。

あすか「えつとね、こんな感じが続くんだけど。笑っちゃうよね」

陽太（真剣に）「笑わない。から、続けて」

あすか「……（覚悟を決める）」

× × ×

あすか（台詞）「ああ、こんな生活知らなければ良かった。一人じゃない空間。誰かと過ごす時間。私、どうしてずっと独りで」

× × ×

あすか（台詞）「それでも、ここでこうして皆と過ごして生まれた歌を、私は、この学校より外の世界に、届けたい……！」

あすか、ハッと我に返る。

あすか「どう、かな？ 私の台詞だけだから、筋はわからないと思うんだけどー」

陽太「最後は、どうなるの？」

あすか「あすかはね。あ、私の名前役名にして貰ったの。あすかは結局学校を出て、狂った世界に戻るんだ」

陽太「……」

あすか「え、どうかした？」

陽太「いや、なんでも。そうだな、じゃ……

気づいた事、言っていない？」

あすか「うん。お願いします」

陽太、一言一言緊張して吐く。

陽太「あの。うーん……その、芝居が小さい
かなって。内にこもってるっていうか。劇

場の一番後ろの席まで、届くかな」

あすか「……」

陽太「ごめん、偉そうに」

あすか「すごい。それいっつもボスに言われ
るやつ。うるさいなって思ってたけどやっ
ぱりそうなんだ。反省します。他には？」

陽太「他？ うーん……それだけ。ちゃんと
役者さんのお芝居だった。上手だったよ」

あすか「本当？ や、照れる」

陽太「……その。あすかは、どうして、お芝
居始めようと思ったの？」

あすか「待って、もう一回言って」

陽太「何を？」

あすか「私の名前」

陽太「……あすか」

あすか、満足げに笑う。

陽太「え、それで？」

あすか「え？ ああ。んっとね、もうだいぶ前だから懐かしい話だけど」

あすか、コルクボードに留めた『永遠結晶』オーディション告知を見やる。

あすか「『永遠結晶』っていう劇団があつたね。子供の頃、そこで私とそう年の変わらぬ子役が舞台上に立っているのを見たの」

○追憶のイメージ・劇場（消灯）

幼いあすか、他に誰も居ない客席にひとり座っている。

ライトで目映いステージ。役者達のシレットが芝居している。

その中に幼い子役の姿。

あすかの声「雲の上の遠い世界だと思ってたのに、もうそこに立っている子がいる。そ

う考えると、胸がドキドキして」

○楠木家・あすかの部屋（夜）

陽太（驚いて）「あすか？」

あすかの頬を涙の筋が伝う。

あすか「私、あの子みたいになりたかったん

だ……どうして忘れてたんだろう」

陽太「大丈夫？」

あすか「うん……私、陽太くんが見てくれて

いたら、本気のお芝居が出来る気がする。

だから」

あすか、涙を拭い、

あすか「週末。私の最後の舞台、見に来て欲

しい」

陽太、うつむく。

あすか、返事をジッと待つ。

陽太「……ごめん。僕には、ムリだ」

あすか「ムリじゃないよ。私にはこれで最後

なんだよ？ 今しかないんだよ」

陽太、目を伏せたまま。

あすか「陽太くん、見て」

あすか、モニター越しに手を陽太の顔に重ねる。

あすか「握手しようよ。お願い。会いに来て。

このまま、私達の青春寂しいまま終わって
もいいの？」

陽太、カメラを見る。

あすか「……ね？」

陽太、ログアウト。

あすか「あ……」

○市民会館・外観（後日）

劇団フルーツサンド公演『ピープル・
イン・ザ・パープルスカイ』看板。

○同・ホール内・ステージ

幕が開く。ギターを抱えたあすかにス
ポットライト。流れる音楽に合わせ、
エアギターで路上弾き語りの体。
アウトロ終えて、眩しげに照明を仰ぐ。

眼前に広がる客席。市松模様の客入り。

あすかM「この劇場のどこに君がいても、私の芝居を届けられるように」

あすか（台詞）「ご静聴ありがとうございます。学校？いえ。私は通っていません。ドロップアウトってやつです」

あすか、ギターを爪弾く。

あすか（台詞）「これ以上お聞きになりたいのでしたら、まずはチャリンチャリン、お願いします。それでは次の曲」

また歌おうとして、見上げる。

あすか（台詞）「え……何？あの空。気味の悪い……紫の、オーロラ？」

紫の照明が舞台を染める。

SEで人々の悲鳴。

× × ×

あすか、教室のセットから七音たち同行者と共に離れる。

教室側に残った松永たち。

松永（台詞）「本当に行くのかい、あすかち

やん。君は、ずっと学校に来たかったんじゃないのか」

あすか（台詞）「……ええ。私は、ずっと学校にいたかった。でも違うんです。どんなに望んでも、私はそこにはいられない」

松永（台詞）「ここに残れ。きっと後悔する」

あすか（台詞）「残ってもっ……残らなくても、私の人生は、きっとずっと痛みと共にあるから。だから私は、せめて私の歌を」

あすか、ギターを爪弾く。

× × ×

暗転した舞台であすか一人にスポットライト。寂しげに周囲を見回す。

あすか（台詞）「みんなどこ？ 一人にしないでよ……違う。最初から、私も狂っていた？ 本当は、ずっと一人であの学校に」

あすか、振り返る。

教室のセットに照明が。松永ら教室に残った一行、笑顔であすかに手を振る。

松永（台詞）「戻っておいで、学校に。もう

君は、どこにも行かなくていいんだ」

あすか（台詞）「叫び出したい。寂しい、寂しい、寂しいよって。例えみんなが。あの学校が、幻だったとしても……帰りたい」

あすか、松永たちに手を振る。

教室の照明、消える。

紫の照明がステージを染める。

あすか（台詞）「それでも、私は行くんだ。

たった一人で。私の歌が……誰か」

あすか、客席を見渡す。

あすか（台詞）「この狂った世界で、ここより外にいる誰かに、届くまで」

幕が下りる。客席、拍手。

カーテンコール。再び幕が開く。

あすか、客席に人の姿を探す。

美砂ら家族、吉沢、明広の姿。

あすか、笑みを浮かべ、カーテシー。

拍手の中、幕が下りる。

幕の裏側。松永、拍手して歩み出る。

松永「今日の芝居、ちゃんとホール全体を意

識出来てたな」

あすか「ありがと、ボス」

松永「楠木あすかはいい女優だった。君がどんな未来を選ぶにせよ、それは変わらない」

あすか「……お世話になりました」

あすか、松永に深々とお辞儀。

七音「座長、お疲れ」

七音ら団員達、あすかを囲み讃える。

あすか「うわーん、七音さーん」

あすか、皆に抱きついて回る。

○同・表（夕）

美砂ら家族と話しているあすか、明広の姿に近づき、駆け寄る。

あすか「アキくん、観てくれてありがと」

明広「よく俺がわかったな」

あすか「わかるよ。意外とね、舞台からお客さんの顔ってみんな見えるの。誰が来てる

のか……誰が来てないのかも」

明広「その、来れなかった一人に代わって見

に来たんだ」

あすか「……え？」

○食品製造工場・外観（夕）

○同・ベルトコンベアー（夕）

作業着姿のやよい、大人達に混ざって
流れ作業中。

○楠木家・あすかの部屋（夜）

あすか、やよいと動画チャット。

やよい（苦笑）「バレたか」

あすか「巧く隠し過ぎだよ」

やよい「ほら。パンデミックの煽りでさ。東

京の、一応私の父親らしい人、養育費払え
なくなっちゃって」

あすか「……いつ、高校やめたの？」

やよい「んー、秋の終わり頃」

あすか、手で顔を伏せる。

あすか「私、やよいにすごく無神経なこと」

やよい「黙ってたのはこっち。高認試験はいずれ受けるって。大丈夫だから」

あすか「でも」

やよい「あーあ。あすかに余計な心配かけたくなかったんだけどな。あのオタク」

あすか「……リモートって最低だね。こんな大事なことも隠し通せちゃう」

やよい「私はそれで助かったけど。ま、最後にあすかの芝居を見れなかったのは心残りだったけどよ」

あすか「やよいは、私の芝居見たかった？」

やよい「見れるもんなら、また見てえかな」

あすか「……そう」

やよい「『見れるもんなら』つただけだからな。お前が何を決めるにしろ、私を言い訳に使うんじゃないぞ」

あすか（笑い）「厳しいな、やよいは」

×

×

×

翌朝。リモート授業中。

陽太、決してカメラ視線にならない。

あすか、個人チャットに下書き。

『舞台、陽太くんに見て欲しかったな』
削除して、打ち直し書き込み。

『そういう訳なんだけど』

『私、卒業式より永遠結晶のオーディションに行くべきだよね』

『だったら、もう陽太くんのことも想わずに済むもん』

返信なし。あすか、書き込み続ける。

あすかの声「じゃあ、正直にぶっちゃける。私、オーディション受けたくない。だって怖い。落ちたらどうしよう」

あすか、手を止め、微かに声を出す。

あすか「みんなに。陽太くんに会える最後の機会かも知れないのに。卒業式をふいにしてまでオーディションに挑んで、もし」

あすか、言葉を飲み込み、書き込み。

『卒業式来て。私のために』

陽太、カメラを見ない。

あすか「……」

あすか、モニター越しに、陽太に拳を突きつける。

陽太、驚いてカメラを見る。気づいた同級生数名も、驚いてカメラを見る。

あすか「何考えてるのか、わかんないよ」

陽太のモニター画面、消える。

あすか「陽太くん」

○入江家・陽太の部屋

陽太、少し驚いて、PCモニター越しに拳つきつけるあすかを見ている。

○入江家・玄関

T『三年前』

陽太、震えてドアに手をかけている。

陽太モノログ、あすかと喋る時よりずっと滑らか。

陽太M「僕の学校は、自分の部屋にしかなかった。世界がこんな事になる、そのずっと前から」

ドアを開けられず、そのまま座り込む。

陽太M「中学の不登校を経て高校デビューを狙ったけれど。一歩でも外に出ようとすると足がすくみ、お腹を壊してしまう」

○同・陽太の部屋

陽太、PCに向き合っている。

陽太M「授業はオンラインで始まる。そう知った時、僕はホッとしたのか。恐怖でいっぱいだったのか」

陽太、震える指で、ズームに入室。

陽太M「ただ、わずかでも世界と繋がっていたくて、必死だったはずだ」

ズーム画面。集まり始めているクラスメイト達。その分割画面の一部に、陽太の姿が収まる。画面の一つで、あすかがカメラ（陽太）に見入っている。

陽太は気づかない。

× × ×

陽太、平静を装い授業を受けている。

陽太M「誰も、何も言ってこない事が最初は心地良くて。段々、寂しくなった」

陽太、あくびをこぼす。分割画面の一つで、それを見たあすかが小さく笑う。

陽太は気づかない。

× × ×

陽太M「そのまま何も起こらず、何も起こせず、三年の月日が過ぎて卒業間近。そんな時、それは届いた」

個人チャットが届く。

『もうすぐ卒業だね』

陽太、少しして、気づく。

陽太M（動揺）「え、なにになになに？」

陽太、興味ない風で視線を逸らす。

横目でチラッと、あすかの姿を確認。

× × ×

個人チャットにあすかの書き込み。

『急にごめんなさい。クラスメイトの

楠木あすかです』

陽太「……」

徐ろに返信を書き込む。

『相手、間違えてませんか？』

画面の中であすかがガッツポーズ。

抱えていたクッションを投げ飛ばす。

陽太、（あすかの視線が離れてる間）

一瞬吹いた後、無表情に戻る。

× × ×

あすか、チャット画面の中で頬の涙を拭う。

あすか「週末。私の最後の舞台、見に来て欲しい」

陽太、うつむく。

陽太M「当然行くべきだ。あすかはこれ以上ないきっかけくれた。ずっと、こんな機会を待ち続けていたじゃないか」

陽太「……ごめん。僕には、ムリだ」

あすか「ムリじゃないよ。私にはこれで最後なんだよ？ 今しかないんだよ」

陽太M「ムリじゃない、行けよ俺」

陽太、目を伏せたまま。

○同・玄関（後日）

陽太、ドア前に立っている。手元のスマホに表示された『ピープル・イン・ザ・パープルスカイ』の公演情報。胸に手を当て、深呼吸。

そっとドアを開け、外を覗く。

家の表の道を男子学生の集団が歩く。

響く大きな高笑い。

陽太、ビクツと怯え、ドアを閉める。

その場に膝から崩れる。溶暗――。

○楠木家・玄関（現在）

――差し込む朝日。

マスクに制服姿のあすか、靴紐を結び

立ち上がる。美砂が見送りに出ている。

美砂「忘れ物ない？」

あすか「今日は何も持つてく必要ないから。

んじゃ、お母さんの分も目に焼き付けてき

ます。可愛い私の卒業式」

美砂「後これだけ。松永さんがね、オーデイ

シヨンの申し込みは済ませてあるって。場所知ってるでしょ。10時スタート」

掛け時計、時刻は6時半。

あすか、固まる。

美砂「正直、お母さんはどちらでもいいわ。

あなたの人生の選択よ。でも他の誰でもな

くて、自分の為に選ぶこと。いい？」

あすか「……うん。でもゴメン、ボスにも謝っておいて。もう決めたの。行って来ます」

あすか、ドアを開き、外に出る。

○高校・正門表

簡素な卒業式案内板。

訪れるあすか、校舎を見上げる。

○同・体育館・表

扉はまだ開いていない。

あすか、段差に腰落として見回す。

周囲にまばらな生徒達。

あすか、正門の方に目を向ける。

あすか（手を合わせ）「来て……お願い」

耳元に近づく足音。

あすか、ハツとして振り返る。

校舎から吉沢がやって来る。

吉沢「早いなー、お前ら。お、楠木か」

あすか「あ、先生。おはようございます」

あすか、立ち上がる。

吉沢「楠木、卒業おめでとう」

あすか（お辞儀して）「吉沢先生。三年間、

お世話になりました」

吉沢「いや……こちらこそだ」

あすか「それと。先日は舞台まで足を運んで

いただき、ありがとうございました」

吉沢「おう凄かったぞ楠木、先生ビックリし

た。あんな良いもんだったんだな、舞台。

もっと早く見ておけばよかったよ」

あすか「舞台見に来た人って皆さんそう仰る

んですよ、もっと早く来れば良かったって。

終われば消えちゃうものだから」

吉沢「そういうもんか。ま、消えちまったら、

また次を作っていくしかないよな。新作決
まったら教えてくれよ、絶対に観に行く」

あすか「あー」

吉沢「続けるんだろ？ 芝居」

あすか、苦笑。

吉沢「あ、体育館まだ開かないから、教室で
待ってていいぞ」

○同・廊下

あすか、慈しむように眺めて歩く。

あすかM「私の学校……私の教室」

三年D組のドアを開ける。

○同・三年D組

開いた窓から風が吹き込む。

教室中央の席、着席しているマスクに
制服姿の陽太が振り返る。

入室するあすか、陽太に気づく。

あすか・陽太（同時に）「あ……」

陽太、席を立とうと腰を浮かす。

あすか（手で制止し）「待って、そのまま。」

立たないで。そこから動かないで」

陽太、再び着席。

陽太「……逃げないよ」

あすか「どうか。それは信じられない。そのままね？」

あすか、隣りの席に座り呼吸を整える。

あすか「待って。心の準備……よし」

勢いよく陽太に振り向く。

あすか「初めまして。陽太くん」

陽太「あ。初めまして」

あすか「……なんか、緊張するね。今日から

一緒にクラスだね」

陽太「え。今日から？」

あすか（満面の笑みで）「だね？」

陽太、しばしあすかを見て、飲み込む。

陽太「……うん。だね」

あすか「ね。部活何するかもう決めた？ 私

中学まで演劇一筋だったから、もつと他の事したいなって考えてるの」

陽太「……僕も、色んな事してみたい」

あすか「あー、修学旅行ってどこ行くんだろ。京都か沖縄か、海外かも。ああ、楽しみだな高校生生活。きっと色々あるんだろうね」

陽太「うん」

あすか「だって三年間もあるんだよ。何が私達を待ってるんだろう。ね？」

陽太、寂しげに笑って、

陽太「……何も。何もなかったよ。教室に來れたのだって、卒業式の日にと」

あすか「……そうかな。最後に飛びっきりの思い出作れた気がする」

あすか、マスクを外す。

あすか「じゃん。どう可愛いでしょ。いつも陽太くんに見てもらってるから、私もうメイクの達人になった」

陽太、緊張しつつマスクを外す。

あすか「あ。陽太くんメイクした？」

陽太「少し」

あすか「へー、上手だね」

二人、しばし見つめ合う。

照れ笑いがこぼれて、

あすか「初めて会った気がしないな」

陽太「そうだね。不思議だ。毎日、顔合わせ
てたような気がする」

あすか「奇遇。私もー」

あすか、陽太の顔をまじまじ眺め、次
第に怪訝な表情。

陽太「そんなじろじろ見ないでよ」

陽太、立ち上がって窓辺に向かう。

あすか「あれ。本当に会うのは初めまして、
だよね？」

陽太、窓の外を見つめる。

あすか「だよね？」

陽太「違う、かも知れない」

あすか「へ？ 初めてだって。だって不登校
だったんでしょ」

陽太「『永遠結晶』に所属した事がある子役
は、一人だけだから」

陽太、あすかに振り返る。

あすかの表情、次第に驚きに満ちて。

○追憶のイメージ・劇場（消灯）

幼いあすか、他に誰も居ない客席にひとり座っている。

ライトで目映いステージ。その中に、幼い子役のシルエット——次第に顔が浮かび上がる。幼い陽太の姿。

陽太の声「芸名でさ。ほんの少し目立ただけだったんだ。CMにも出たのが良くなかったのかな。それがバレたら、バカみたいにイジメられて……後悔してたよ」

幼いあすか、全力で拍手。
幼い陽太、客席へと丁寧にお辞儀。

○高校・三年D組

陽太、あすかを見つめる。

陽太「ありがとう、僕を覚えていてくれて」
あすか「ウソ……」

陽太「今日は」

陽太、咳払いし、よく通る舞台発声。

陽太「今日はどうしても家を出て、あすかに
伝えたいと思った。何も残らないと思つて
た僕の舞台が、あすかには届いてたんだ」
あすか「私、ずっと」

○回想・公民館・稽古場

あすか、劇団の仲間達と稽古に励む。

○現在・高校・三年D組

あすか「ずっと陽太くんを目指してたんだ」

陽太「……舞台は終わったら消えるもんだと
思ってた。けど」

あすか、陽太に手を差し出す。

陽太「……」

陽太、緊張して手を伸ばす。

二人、手を繋ぐ。

あすか「……なんか、エロい」

陽太、手を引こうとする。

あすか「ウンウンウン。あったかい」

二人、手を繋いだまま見つめ合う。

あすか「卒業式。一緒に出ようね」

陽太「……僕は、一人で頑張るよ」

あすか「どうして。いいよムリしなくて」

陽太「ムリしたいんだ。あすかは？ 今、何がしたい？」

あすか「ええ？ ……そんなの。私は」

フラッシュ・インサート――

劇場。幼いあすか、客席からステージの幼い陽太に拍手を送る。

× × ×

高校生のあすか、ステージ上で客席から拍手を浴びている。

× × ×

あすか、自分でも驚いたように、

あすか「私、オーディションに挑戦したい」

陽太（肯く）「さよなら。あすか」

あすか「え？ （次第に決意固め）あ……うん。さよなら、陽太くん」

二人、手を離す。

陽太「オーデイションの時間は？」

あすか（時計を見て）「10時から」

時計、8時過ぎ。

陽太「ダッシュだ。電車もバスも時間が合えば、ギリ」

あすか、勢いよく立ち上がる。

あすか「あ、あのね。私、陽太くんが初恋の人で良かった」

あすか、陽太の頬にキス。

あすか「大好きでした」

マスクをして、ダッシュで教室を飛び出す。

陽太、頬を押え、見送る。

○同・正門表

あすか、走って飛び出す。

○同・体育館・表

陽太、緊張し、待機する生徒達の中へ。

○バス停

バス出発。あすか、遅れて走り来る。
その場で息を整え、また走り出す。

○高校・体育館

簡素な飾りの式会場。まばらな生徒達
に混ざって、緊張した陽太が入場。

○地元の駅・ホーム

あすか、ベンチに倒れ込み、息を整え
て時計を見上げる。8時55分。

○高校・体育館

スクリーンに映る校長の挨拶。

陽太の横からやよいが顔を出す。

やよい「よう。ひきこもり」

陽太、ビクッと驚いて振り返る。

明広はやよいを小突く。

明広「お前は出席一年早えよ」

陽太、緊張して二人を見ている。

やよい「ねえ。あすか知らない？」

陽太「え。なんで僕に」

明広「そりゃ、俺がみんなにバラしたから」

陽太「え？ ……あ」

フラッシュ・インサート――

三年D組のリモート授業。分割画面の中、互いを見つめ合ってるあすかと陽太を、クラスメイト達がそれぞれの環境からニヤけて見守っている。

× × ×

同級生達、ニヤけて陽太を見る。

陽太（苦笑して）「あすかは、オーデイションに向かってる」

○電車・車内

あすか、座っている。走り出す電車。車窓の風景。地元の街を離れていく。

○公民館・稽古場

稽古中の劇団。時計を気にする松永。

時刻は9時15分。

○走行中の電車・車内

流れ去る街並。あすか、涙を堪える。

○都市部の駅・ロータリー

駅の階段を駆け下りるあすか、バス停まで来て、街頭ビジョンの時計を見上げる。時刻は10時5分。

あすか「あ……」

周囲の雑音消え、無音。

脱力。しばし、そのまま立ち尽くす。

スマホの着信音。

力なく出て、小さなズーム画面を開く。

自撮りしている陽太のカメラ視線。

陽太「あすか。卒業式、出たよ」

あすか「……おめでとう、陽太くん。あとゴメン、オーディション間に合わなかった」

陽太、周囲の雑音で聞こえておらず、
陽太「ええ、何？ それからさ、言いたい事

があるって」

あすか「え？」

陽太の背後に、卒業式に居合わせた生

徒達が広がり、こちらを見ている。

やよい「せーの」

生徒一同「楠木あすかーっ、頑張れーっ」

あすか、びっくり。

周囲の雑音、戻ってくる、

やよい「あすかなら絶対受かるっ」

吉沢「ファン一号は先生だからな？」

女子「ごめん、二人のチャット気づいてた」

男子「誰か知らんが、やったれっ」

明広「次の舞台決まったら、絶対やよい連れ

て見に行くから」

あすか、噛みしめる。

陽太、最後にアップになり、

陽太「あすか。卒業おめでとう」

あすか、肯く。

陽太「それから。行ってらっしゃい」

あすか「……行って来ます」

あすか、皆に手を振るとスマホのズームを閉じて、電話を掛ける。

あすか「あの、本日10時の回のオーディション申し込んでいた者なのですが、遅れてしまい……はい。申し訳ありません」

あすか、電話したまま走り出す。

あすか「ですがお願いします、どうしても受けたいんです。今？ 走ってますっ」

あすかM「私たちの青春は、小さなハコの中にあつた」

○高校・三年D組

窓から吹き込む桜の花びら。

黒板を埋め尽くす生徒達の落書き。

吉沢、ひとり満足そうに眺め、自分のスマホで撮影する。

黒板の片隅にある落書き。

『ボクも好きだ。 陽太』

あすかM「確かに、そこにあつたんだ」

了.